



福田 勝之

一般社団法人東北経済連合会 副会長

みなとまち新潟の歴史と未来

新潟は、江戸時代には北前船が行き交い、全国各地からさまざまな物資が集まる日本でも有数の港町でした。また、「安政の五カ国条約」により開港された5港の一つでもあったことから、今も港町の文化・風情が至るところに点在しています。

特に、信濃川の河口に位置している新潟市の^{しもまち}下町と呼ばれる地域には、開港5港当時の税関として現存する唯一の建物である旧新潟税関庁舎や、廻船問屋として栄えた町家など、「みなとまち新潟」を象徴する建造物が数多く残されています。特に、下町にある湊稻荷神社には、全国でも珍しい、廻る「願懸け高麗犬」が設置されています。伝承によれば、和船の出入りで新潟港が賑わっていた当時、港に入る船の船乗りは毎夜、新潟の花街で遊びに興じていましたが、船が出航し、馴染み客が行ってしまうことを悲しんだ遊女たちは、願懸け高麗犬を廻して西の方角に頭を向けることで、西風が吹いて海が荒れ、出航できなくなるよう祈願していたということです。

一方、今日、新潟では華やかな花柳界が街を彩っています。27年前、芸妓さんたちと新潟の財界が協力して柳都振興という会社を立ち上げ、芸妓さんを養成し、市山流のお師匠さんのご指導のもと、芸事に励んでおり、若い芸妓さんたちが新潟のお座敷を賑やかにしてくれています。

このように港町文化が色濃く残る新潟の下町に、新たな観光スポットとなっている場所があることをご存知でしょうか？

それは、江戸時代、北前船や千石船が出航する際に風や天候を見るための場所として、さらには航路目標ともなる重要な山であったとされる「日和山」です。日和山は、全国に約80箇所はあったと言われており、山形県鶴岡市や宮城県石巻市など、東北地方の港町にも名称が存在しています。

その忘れ去られていた日和山の歴史に、「にいがた観光カリスマ」に認定されている野内隆裕氏が目を付けました。彼は、手作りで日和山の歴史案内板等を作成し、日和山を飾り付けて催事を行うなど、多くの人に足を運んでもらう試みを続け、1日千人もの人が訪れたこともあるほど、新たな賑わいが創出されています。

新潟港は、2019年に開港150周年を迎えます。これからも港町文化を大事にしながら、対岸諸国との物流拠点として、さらには災害時における太平洋側港湾をバックアップする防災拠点として発展していくために、「みなとまち新潟」にふさわしい物流・人流の活性化を目指した取り組みが今まで以上に求められています。

かつて先達たちが日和山から港を眺め、海の先を見据えたように、今、私たちが高い見地から将来を見据え、新潟の未来、日本の未来を考え、方向を見定めていくことが大切だと思っています。

(一般社団法人新潟県商工会議所連合会 会頭・ふくだ かつゆき)